

校友の近況

下山敏郎前支部長(中50回) 日本写真協会賞特別賞受賞



このたび、下山さんが財団法人日本写真協会より、2008年度日本写真協会賞特別賞を贈られた。受賞の理由は、著書『世界を制覇した日本のカメラ 奮闘したサムライたちの記録』によって、戦後日本カメラ産業の国際的活躍を当事者の一員として記録、その意義を世に知らしめた功績である。

戦後の経済立て直しに日本人の得意な精密工業、特にカメラの輸出で外貨を稼ごうと森山欽司・真弓夫妻とマミヤ、ニコンの会社役員、オリンパスの下山さんが昭和30年、アメリカ市場開拓にプロペラ機に乗り、NYに向かった。3ヵ月後にジャパン・カメラショーの開催にこぎつけ、徐々にアメリカ市場で日本製カメラが信頼されるようになった。カメラが先導役となって、ラジオ、テレビ、ミシン、顕微鏡、自動車と多くの輸出に勢いが出て、いつの間にか日本は経済大国と言われるようになった。

この書は自らの体験をもとに、汗と涙を流し、きちんと事実を語る。カメラ業界の記録という形をとりながら、我が国の発展の道、ならびに下山さんが一生かけて追い続けてきた日本人としての誇り、正直さ、勤勉な精神を感じ取ることができる。「僕の長いサラリーマン生活の集大成として、何かせねばいけないのでは」との思いで取り

組まれたそうである。

「カメラはドイツ製」と言われた時代があったのに、今ドイツではカメラの生産はしていないという。日本人が憧れ、お手本にしていたドイツ製カメラの末路を本書で見ることとなった。日本製カメラも今後を見極めなければならないと教えている労作である。すべての物作りに考えねばならないことをも教えている。

編集部注：『雪椿』第31号の「校友の近況」欄でこの本の出版を紹介した

小林世紀子（高11回）

三浦雄一郎チョモランマ遠征隊に 食糧隊長として参加

高校時代から山に憧れ魅せられて、ヒマラヤに行くのが夢でした。そして、法政大学山岳部では「より高く、より困難を求めて！」のコンセプトの中で、いつかはヒマラヤの中でも“世界最高峰”である「エベレスト」(8,848m)へ行く夢を一層大きくしたのです。

遠征（登頂）には費用や体力などの他に“チャンス”がないと実現しないのですが、2000年に法政大学山岳部オール法政のチョモランマ遠征に60才で参加し、2003年には三浦エクスペディション（Expedition）に参加、そして今回、3回目のチョモランマ遠征を果たすことができました。

三浦雄一郎さんとは40年近く前から会社の仕事（当時、S&B 妙高サンバードイン支配人）を通じて懇意だったこともあって食糧隊でメンバーに選ばれ、今回も食糧隊長として参加できたことは非常に幸せでした。一言でいえば「山男冥利に尽きる」です。

今回の遠征は「チベット問題」で入国が困難になったり、オリンピック聖火が頂上に登るまで登頂許可が出ないなど予想外のことが多々発生したのですが、75才でエベレスト登頂を果たした三浦さんを食事面からサポートできたことは大きな喜びです。

ベースキャンプ（5,360m）での調理は圧力釜で調理です。朝食は新潟県産コシヒカリの無洗米を炊いて目玉焼きと味噌汁が定番で、夜は寒いので鍋物がメイン。三浦さんの好物はキムチですが持病を配慮、豆乳

を入れてマイルドにしました。頂上アタックに備えてはパウンドケーキを焼いて預けました。5月26日、登頂成功。三浦さんはおいしそうにケーキをほおばったと聞きました。



三浦雄一郎氏（右）とのひととき

4月5日に出発し6月9日に帰国しましたが、高度障害のため食欲がなくなり体重が10kgも減って体調不十分だったこともあり、同期生への遠征報告は7月29日になってしまいました。場所は出発の壮行会と同じ高田・西城町1の上海大食堂。みんなから「もっと食べよ」と言われても胃袋が小さくなったせいか控えめでした。それでも、松川太賀雄から「お前が頑張ってくれるので同期の者も鼻が高い」と言われて、無事に帰って来れた喜びを実感しました。

今回の遠征は会社（エスビー食品）をはじめ、校友や同期生など多くの方々のお陰だと感謝しています。

藤嶋弘徳（高10回）

ジョン・レノンと 暮らす毎日



「ジョン・レノン・ミュージアム」は、この秋開館8周年を迎えます。2代目館長の私は、もちろんミュージアム経験なし、確かにビートルズ世代ではありましたが、研究者でも熱烈なファンでもありませんでした。

戸惑いながらもこの5年半、オノ・ヨーコさんや親会社との折衝、ミュージアムの企画・運営から、トラブル処理、国内外の文化関係者、地域行政との関わり等を維持していくのは、なかなか気苦労の多い仕事です。

そう遠くない日には、手を離れる仕事ですが、大成建設の仕事以外に、このような文化的な仕事に関わられたのも、私の人生の彩りの一つになったと受け止めています。

最近の印象的な出来事は、特別展開会式に駐日英国大使フライご夫妻にご出席を賜り館内をご案内させていただいたこと。また英国の The National Trust の方をミュージアムにお招きして講演会を開いたことです。英語が苦手の高校時代からすると、あの丸田先生もビックリされる私の姿でありましょう。

水沢順一（高17回）

茉莉花 (ジャスミン)



東京の銀座の一等地、銀座6丁目、東京メトロ銀座駅から300m程新橋方向に歩いたビルの3階に、久世朋子さん（高27回）が経営する「茉莉花

（ジャスミン）」という、カウンターバーがあります。ここは10席程のカウンター席があるだけですが、全体に味わいのある高級木材を基調にした内装で、ゆったりとして落ち着いた感じのお店です。バーの中には各種お酒が並んでいるのとチャイナドレスに身を包んだ久世さんがいるだけ。

久世さんは、ご主人（演出家の久世光彦氏）が一昨年に急逝された後、昨年の5月に「茉莉花」を開店しました。来店する人達は、光彦氏に所縁を持つ作家・作曲家や編集者の方が多いのですが、高田高校のOBも多く、銀座付近での会合の2次会としてや、一人でぶらりとやってくるOBもいるとのこと。また6月の東京支部総会のお開きの後には、お店は高田高校の卒業生で貸し切り状態になるそうです。料金も、銀座とは思えない程のお手頃な価格で、自家製のおつまみも豊富です。

東京都中央区銀座6-6-9

ソフレ・ド・銀座ビル3階

平日午後8時～午前1時頃まで

（土日休祭日は休業）

久島士郎（高28回）

野崎 弘氏(高2回)の 叙勲について



去る4月29日、〔春の叙勲〕発表で高校第2回卒の野崎弘氏が、長年にわたり鉄道業務に従事された顕著な業績が認められ、栄えある〔瑞宝双光章〕を受章された。高校2回卒の叙勲受章としては、平成17年秋に、ただ今校友会東京支部支部長の佐久間昇二氏の受章に次いで2人目で、同期である我々にとって大変喜ばしい事であると共に、誇りでもある。

野崎氏は旧三和村の出身で、昭和29年大学卒業と同時に日本国有鉄道に入社。東京鉄道管理局、関東支社を経て長きにわたって本社の旅客営業畑に勤務、その間、東北、上越、北陸など全国新幹線鉄道整備計画にも参画された。その後、優れた英知と積み重ねられた豊富な実績で東海道・山陽新幹線の運営に尽力され、昭和61年3月、東京南鉄道管理局横浜駅長を最後に国鉄を退職された。

野崎弘氏の〔談話〕

顧みると人生は将に人との出会いそのものであり、このたび叙勲の栄に浴せたのもひとえに長年にわたり大勢の方々から頂いた温かいご指導ご支援の賜と感謝と御礼を申し上げます。

さしたる功績もございませんが、5月21日、赤倉ホテルで中57回・高2回の喜寿パーティーの帰路に、バスの車窓から板倉付近に林立する新幹線の高架工事を目の当たりにして喜びを噛み締めました。昭和46年ごろ、北陸新幹線の計画時に、長野からアルプスをトンネルで抜き、北陸地方と結ぶ最短ルートも検討されましたが、当時密かに故郷経由を願望した身にとっては、感慨ひとしおでした。

小林外吉（中57回）

拝啓、畏友 清水邦夫様

すっきり長らくのご無沙汰、お許しを。

どうしているかな……と思いつつ、つい身すぎ世すぎに追われているうちに、思いもかけず時間ばかりが流れ去った。

久々に一筆を思い立ったのは、貴兄の快挙「平成20年春の叙勲・旭日小綬章」受勲を知ったからのこと。とりあえず一言、祝いのことばを贈らねば、と。

本当におめでとう。同じ高田高校で三年間一緒に学んだ仲間の一人として、我が事のようにうれしい。しかも三年生のときは同級生だったからな。

「清水邦夫はオレの同級生だぞ！」
と、日本中に触れ回りたい気分だ。

清水邦夫（しみずくにお）。齢はむろん同じ昭和11年生まれ。早稲田大学文学部演劇科卒。大学を出た直後は岩波映画に入社して、「おや、芝居の世界ではなく、映画作りを選んだのか……」と思っていたが、オヌシの真骨頂はやはり演劇の世界にあった。やがて転じたその世界で、劇作家・演出家として清水邦夫のエネルギーな活躍は、まさにめざましいの一言に尽きる。

その証拠ともいえるべき受賞歴を記せば、

- ・1958年 テアトロ演劇賞、早稲田演劇賞
- ・1974年 岸田國土戯曲賞
- ・1976年 紀伊国屋演劇賞個人賞
- ・1980年 泉鏡花文学賞
- ・1983年 読売文学賞
- ・1990年 芸術選奨文部大臣賞
- ・1993年 芸術選奨文部大臣賞

ざっと、こんな具合で、平成14年にはついに「紫綬褒章」を受章。凄いというほかはないね。それに続いて、今度は「旭日小綬章」だから、ここは一つ、小生が肝煎を務めて「我らが誇り・清水邦夫を囲んでの大祝宴」を催さねばならぬと思っている。

貴兄と最後に酒飯を共にしてから、もう随分時が経つ。あれは確か同じ高田高校の後輩釋善念を交えて「親鸞」について語り合った一夜だった。話に花が咲いて最後は「もう閉店時間ですので……」と、追い出されたのを覚えている。阿々。

清水邦夫狂の釋善念は、うちへよく遊びに来るが、来るたびに「清水さんは……清水さんは……」と、敬愛してやまない劇作家の話ばかりで、この後輩坊主が帰ったあと、決まって山妻は溜息をつきながら、「お父さんの同級生には、こんな偉い人もいるのにねエ……」

さすがにそこで口をつぐんで、「それに引きかえ、お父さんはハズレクジだったわねエ……」
という続きの部分は声には出さない。

ところで、先日の釋善念の話では、ここしばらくは体調が万全ではないようでいささか案じています、とのこと。

まだまだ老け込む齢ではない（と、これは小生が自分自身にいい聞かせていることだが）。現代日本演劇史のカリスマ的巨人には、少なくともあと十年や十五年は現役で頑張ってもらわねば困る。

受勲の祝宴をいつにしたらいいか、祝いの酒と肴はどんなものが希望か、乞一報。楽しみに返事を待っている。

（無名同級生・高7回）